

愛と美について

太宰治

青空文庫

兄妹、五人あつて、みんなロマンスが好きだった。長男は二十九歳。法学士である。ひとに接するとき、少し尊大ぶる悪癖があるけれども、これは彼自身の弱さを庇かばう鬼めんの面であつて、まことは弱く、とても優しい。弟妹たちと映画を見にいつて、これは駄作だ、愚劣だと言いながら、その映画のさむらいの義理人情にまいつて、まず、まっさきに泣いてしまうのは、いつも、この長兄である。それにきまつていた。映画館を出てからは、急に尊大に、むつと不気嫌になつて、みちみち一言も口をきかない。生れて、いまだ一度も嘘うそ言そといふものをついたことがないと、躊躇ちゆうちよせず公言している。それは、どうかと思われなければならない。しかし、剛直、潔白の一面は、たしかに具有していた。学校の成績は、あまりよくなかつた。卒業後は、どこへも勤めず、固く一家を守っている。イプセンを研究している。このごろ人形の家をまた読み返し、重大な発見をして、頗すこぶる興奮した。ノラが、あのととき恋をしていた。お医者いしやのランクに恋をしていたのだ。それを発見した。弟妹たちを呼び集めて、そのところを指摘し、大声叱咤しつた、説明に努力したが、徒勞であつた。弟妹たちは、どうだか、と首をかしげて、にやにや笑っているだけで、一向に興奮の色を示さぬ。いったいに、弟妹たちは、この兄を甘く見ている。なめている風ふうがある。長女は、二

十六歳。いまだ嫁がず、鉄道省に通勤している。フランス語が、かなりよくできた。脊丈せたくが、五尺三寸あった。すごく、瘦やせている。弟妹たちに、馬、と呼ばれることがある。髪を短く切つて、ロイド眼鏡をかけている。心が派手で、誰とでもすぐ友達になり、一生懸命に奉仕して、捨てられる。それが、趣味である。憂愁、寂せきりよう寥りようの感を、ひそかに楽しむのである。けれどもいちど、同じ課に勤務している若い官吏に夢中になり、そうして、やはり捨てられたときには、そのときだけは、流石さすがに、しんからげつそりして、間の悪さもあり、肺が悪くなつたと嘘をついて、一週間も寝て、それから頸くびに縋ほうたい帯を巻いて、やたらに咳せきをしながら、お医者に見せに行つたら、レントゲンで精細にしらべられ、稀まれに見る頑強の肺臓であるといつて医者にはめられた。文学鑑賞は、本格的であつた。実によく読む。洋の東西を問わない。ちから余つて自分でも何やら、こつそり書いている。それは本箱の右の引き出しに隠して在る。逝せいきよ去二年後に発表のこと、と書き認められた紙片が、その蓄積された作品の上に、きちんと載せられているのである。二年後が、十年後と書き改められたり、二カ月後と書き直されたり、ときには、百年後、となつていたりするのである。次男は、二十四歳。これは、俗物であつた。帝大の医学部に在籍。けれども、あまり学校へは行かなかつた。からだが弱いのである。これは、ほんものの病人である。おど

ろくほど、美しい顔をしていた。吝りんしよく嗇しよくである。長兄が、ひとにだまされて、モンテエ
 ニユの使ったラケットと称する、へんてつもない古ぼけたラケットを五十円に値切つて買
 つて来て、得とくとく々としていたときなど、次男は、陰でひとり、余りの痛憤に、大熱を発し
 た。その熱のために、とうとう腎じんぞう臓をわるくした。ひとを、どんなひとをも、蔑視べつしした
 がる傾向が在る。ひとが何かいうと、ケツという奇怪な、からす天狗てんぐの笑い声に似た不愉
 快きわまる笑い声を、はばかりず発するのである。ゲエテ一点張りである。これとても、
 ゲエテの素朴な詩精神に敬服しているのではなく、ゲエテの高位高官に傾倒しているらし
 い、ふしが、無いでもない。あやしいものである。けれども、兄妹みんなで、即興いの詩な
 ど、競争する場合には、いつでも一ばんである。できている。俗物だけに、謂いわば情熱の
 客観的把握はあくが、はつきりしている。自身その気で精進すれば、あるいは一流作家になれる
 かも知れない。この家の、足のわるい十七の女中に、死ぬほど好かれている。次女は、二
 十一歳。ナルシツサスである。ある新聞社が、ミス・日本を募つていたとき、あのとときに
 は、よほど自己推薦しようかと、三夜身悶みもたえした。大声あげて、わめき散らしたかった。
 けれども、三夜の身悶えの果、自分の身長が足りないことに気がつき、断念した。兄妹の
 うちで、ひとり目立つて小さかった。四尺七寸である。けれども、決して、みつともない

ものではなかった。なかなかである。深夜、裸形で鏡に向い、にっと可愛く微笑してみた。ふつくらした白い両足を、ヘチマコロンで洗って、その指先にそっと自身で接吻して、うっとり眼をつぶってみたり、いちど、鼻の先に、針で突いたような小さい吹出物して、憂鬱のあまり、自殺を計ったことがある。読書の撰定に特色がある。明治初年の、佳人之奇遇、経国美談などを、古本屋から捜して来て、ひとりで、くすくす笑いながら読んでゐる。黒岩るいこう涙香、森田思軒しけんなどの、翻譯物をも、好んで読む。どこから手に入れて来るのか、名の知れぬ同人雑誌をたくさん集めて、面白いなあ、うまいなあ、と真顔でつぶや呟きながら、端から端まで、たんねんに読破している。ほんとうは、鏡花をひそかに、最も愛読していた。末弟は、十八歳である。ことし一高の、理科甲類に入学したばかりである。高等学校へはいってから、かれの態度が俄然がぜんかわった。兄たち、姉たちには、それが可笑おかしくてならない。けれども末弟は、大まじめである。家庭内のどんなささやかな紛争にでも、必ず末弟は、ぬつと顔を出し、たのまれもせぬのに思案深げに審判を下して、これには、母をはじめ一家中、閉口している。いきおい末弟は、一家中から敬遠の形である。末弟には、それが不満でならない。長女は、かれのぶつとふくれた不気嫌の顔を見かねて、ひとりでは大人おとなになった気でいても、誰も大人と見ぬぞかなしき、という和歌を一首つくって

末弟に与え、かれの在野遺賢の無聊ぶりようをなぐさめてやった。顔が熊の子のようで、愛くるしいので、きようだいたちが、何かとかれにかまいすぎて、それがために、かれは多少おつちよこちよいのところがある。探偵小説を好む。ときどきひとり部屋の中で、変装してみたりなどしている。語学の勉強と称して、和文対訳のドイルのものを買って来て、和文のところばかり読んでいる。きようだい中で、母のことを心配しているのは自分だけだと、ひそかに悲壮の感に打たれている。

父は、五年まえに死んでいる。けれども、くらしの不安はない。要するに、いい家庭だ。ときどき皆、一様におそろしく退屈することがあるので、これには閉口である。きようは、曇天、日曜である。セルの季節で、この陰鬱の梅雨が過ぎると、夏がやって来るのである。みんな客間に集つて、母は、林檎りんごの果汁をこしらえて、五人の子供に飲ませている。末弟ひとり、特別に大きいコップで飲んでゐる。

退屈したときには、皆で、物語の連作をはじめるのが、この家のならわしである。たまには母も、そのお仲間入りすることがある。

「何か、無いかねえ。」長兄は、尊大に、あたりを見まわす。「きようは、ちよつと、ふうがわりの主人公を出してみたいのだが。」

「老人がいいな。」次女は、卓の上に頬杖ほおづえついて、それも人さし指一本で片頬を支えているという、どうにも気障きざな形で、「ゆうべ私は、つくづく考えてみたのだけれど、「なに、たつたいま、ふと思いついただけのことなのである。」人間のうちで、一ばんロマンチックな種属は老人である、ということがわかったの。老婆は、だめ。おじいさんで無くちや、だめ。おじいさんが、こう、縁側にじっとして坐っていると、もう、それだけで、ロマンチックじゃないの。素晴らしいわ。」

「老人か。」長兄は、ちよつと考える振りをして、「よし、それにしよう。なるべく、甘い愛情ゆたかな、綺麗きれいな物語がいいな。こないだのガリヴァ後日物語は、少し陰惨すぎた。僕は、このごろまた、ブランドを読み返しているのだが、どうも肩が凝る。むずかしすぎる。」率直に白状してしまった。

「僕にやらせて下さい。僕に、「ろくろく考えもせず、すぐに大声あげて名乗り出たのは末弟である。がぶがぶ大コップの果汁を飲んで、やおら御意見開陳。」僕は、僕は、こう思いますねえ。」いやに、老成ぶつた口調だったので、みんな苦笑した。次兄も、れいのけツという怪しい笑声を発した。末弟は、ぶうつとふくれて、

「僕は、そのおじいさんは、きつと大数学者じゃないか、と思うのです。きつと、そうだ。」

偉い数学者なんだ。もちろん博士さ。世界的なんだ。いまは、数学が急激に、どんどん変っているときなんだ。過渡期が、はじまっている。世界大戦の終りごろ、一九二〇年ごろから今日まで、約十年の間にそれは、起りつつある。「きのう学校で聞いて来たばかりの講義をそのまま口真似してはじめるのだから、たまったものでない。「数学の歴史も、振りかえって見れば、いろいろ時代と共に変遷して来たことは確かです。まず、最初の段階は、微積分学の発見時代に相当する。それからギリシャ伝来の数学に対する広い意味の近代的数学であります。こうして新しい領分が開けたわけですから、その開けた直後は高まるというよりも寧ろ^{むし}広まる時代、拡張の時代です。それが十八世紀の数学であります。十九世紀に移るあたりに、矢張りかかる階段があります。すなわち、この時も急激に変わった時代です。一人の代表者を選ぶならば、例えば Gauss、g、a、u、s s です。急激に、どんどん変化している時代を過渡期というならば、現代などは、まさに大過渡期であります。「てんで、物語にもなんにもなつてやしない。それでも末弟は、得意である。調子が出て来た、と内心ほくほくしている。「やたらに煩瑣^{はんさ}で、そうして定理ばかり氾濫^{はんらん}して、いままでの数学は、完全に行きづまっている。一つの暗記物に墮^おしてしまった。このとき、数学の自由性を叫んで敢然立ったのは、いまのその、おじいさんの博士であります。えら

いやつなんだ。もし探偵にでもなったら、どんな奇怪な難事件でも、ちよつと現場をまわりして、たちまちぼんと、解決してしまうにちがいない。そんな頭のいい、おじいさんなのだ。とにかく、Cantorの言うたように、「また、はじまった。「数学の本質は、その自由性に在る。たしかに、そうだ。自由性とは、Freiheitの訳です。日本語では、自由という言葉は、はじめ政治的の意味に使われたのだそうですから、Freiheitの本来の意味としっくり合わないかも知れない。Freiheitとは、とらわれない、拘束されない、素朴のもの

のを指しているのです。Freiでない例は、卑近な所に沢山あるが、多すぎてかえって挙げにくい。たとえば、僕のうちの電話番号はご存じの通り4823ですが、この三桁^{けた}と四桁^{けた}の間に、コンマをいれて、4.823と書いている。パリ^{パリ}のように48-23とすれば、まだしも少しわかりよいのに、何でもかでも三桁^{けた}おきにコンマを附けなければならぬ、というのは、これはすでに一つの囚^{とら}れであります。老博士はこのようなすべての陋^{ろう}習^{しゅう}を打破しようと、努めているのであります。えらいものだ。真なるもののみが愛すべきものである、とポアンカレが言っている。然り。真なるものを、簡潔に、直接とらえ来つたならば、それでよい。それに越したことがない。「もう、物語も何もあつたものでない。きようだいたちも、流星に顔を見合せて、閉口している。末弟は、更にがくがくの論を続ける。「空論をお話

して一向とりとめがないけれど、それは恐縮であります。丁度このごろ解析概論をやっているの、ちよつと覚えていたのですが、一つの例として級数についてお話ししたい。二重もしくは、二重以上の無限級数の定義には、二種類あるのではないか、と思われる。画を書いてお目かけると、よくわかるのですが、謂わば、フランス式とドイツ式と二つある。結果は同じ様なことになるのだが、フランス式のほうは、すべての人に納得の行くように、いかにも合理的な立場である。けれども、いまの解析の本すべてが、不思議に、言い合せたように、平気でドイツ式一方である。伝統というものは、何か宗教心をさえ起させるらしい。数学界にも、そろそろこの宗教心がいりこんで来ている。これは、絶対に排撃しなければならぬ。老博士は、この伝統の打破に立ったわけであります。「意気いよいよあがった。みんなは、一向に面白くない。末弟ひとり、まさにその老博士の如くふるいたって、さらにがくがくの論をつづける。

「このごろでは、解析学の始めに集合論を述べる習慣があります。これについても、不審があります。たとえば、絶対収斂しゅうれんの場合、昔は順序に無関係に和が定るといふ意味に用いられていました。それに対して条件的という語がある。今では、絶対値の級数が収斂する意味に使うのです。級数が収斂し、絶対値の級数が収斂しないときには項の順序をか

えて、任意の limit に tend させることができるということから、絶対値の級数が収斂しなければならぬということになるから、それでいいわけだ。」少し、あやしくなつて来た。心細い。ああ、僕の部屋の机の上に、高木先生の、あの本が載せてあるんだがなあ、と思つても、いまさら、それを取りに行つて来るわけにもゆくまい。あの本には、なんでも皆書かれて在るんだけれど、いまは泣きたくなくて、舌もつれ、胴ふるえて、悲鳴に似たかん高い声を挙げ、

「要するに。」きょうだいたちは、みな一樣にうつむいて、くすと笑つた。

「要するに、」こんどは、ほとんど泣き声である。「伝統、ということになりますと、よほどのあやまちも、気がつかずに見逃してしまふが、問題は、微細なところに沢山あるのです。もつと自由な立場で、極く初等的な万人むきの解析概論の出ることを、切に、希望している次第であります。」めちやめちやである。これで末弟の物語は、終つたのである。

座が少し白けたほどである。どうにも、話の、つきほが無かつた。皆、まじめになつてしまつた。長女は、思いやりの深い子であるから、末弟のこの失敗を救済すべく、嘖き出したいのを我慢して、気を押し沈め、しずかに語つた。

「ただいまお話ございましたように、その老博士は、たいへん高邁こうまいのお志を持つて居られます。高邁のお志には、いつも逆境がつきまといまいます。これは、もう、絶対に正確の定理のようでございます。老博士も、やはり世に容れられず、奇人よ、変人よ、と近所のひとたちに言われて、ときどきは、流石に侘わびしく、今夜もひとり、ステッキ持つて新宿へ散歩に出ました。夏のころの、これは、お話でございます。新宿は、たいへんな人出ひとででございます。博士は、よれよれの浴衣に、帯を胸むな高たかにしめ、そうして帯の結び目を長くうしろに、垂れさげて、まるで鼠の尻尾しつぽのよう、いかにもお気の毒ふうさいの風采ふうさいでございます。それに博士は、ひどい汗かきなのに、今夜は、ハンカチを忘れて出て来たので、いっそう惨めなことになりました。はじめは掌てのひらで、お顔の汗を拭い払って居りましたが、とてもそんなことで間に合うような汗ではございませぬ。それこそ、まるで滝のよう、額から流れ落ちる汗は、一方は鼻筋を伝い、一方はこめかみを伝い、ざあざあ顔中を洗いつくして、そうしてみんな顎あごを伝って胸に滑り込み、その氣持のわるさつたら、ちようど油あぶら壺つぼ一ぱいの椿つばき油あぶらを頭からどろどろ浴びせかけられる思いで、老博士も、これには参つてしまいました。とうとう浴衣の袖で、素早く顔の汗を拭い、また少し歩いては、人に見つからぬよう、さつと袖で拭い拭いしているうちに、もう、その両袖ながら、夕立に打たれた

ように、びしょ濡れになつてしまいました。博士は、もともと無頓着むとんじやくなお方でございましたけれども、このおびただしい汗には困惑しちやいまして、ついに一軒のビヤホールに逃げ込むことに致しました。ビヤホールにはいつて、扇風器のなまぬるい風に吹かれていたら、それでも少し、汗が取りました。ビヤホールのラジオは、そのとき、大声で時局講話をやっていました。ふと、その声に耳をすまして考えてみると、どうも、これは聞き覚えのある声でございます。あいつでは無いか？　と思つていたら、果して、その講話のおわりにアナウンサーが、その、あいつの名前を、閣下という尊称を附して報告いたしました。老博士は、耳を洗いたい気持になりました。その、あいつというのは、博士と高等学校、大学、ともにともに、机を並べて勉強して来た男なのですが、何かにつけて要領よく、いまは文部省の、立派な地位にいて、ときどき博士も、その、あいつと、同窓会などで顔を合せることがございまして、そのたびごとに、あいつは、博士を無用に嘲ちやう弄ろうするのでございます。気のきかない、げびた、ちつともなつていない陳腐な駄洒落だじゃれを連発して、取り巻きのものもまた、可笑しくもないのに、手を拍うたんばかりに、そのあいつの一言一言に笑い興じて、いちどは博士も、席を蹴けつて憤然と立ちあがりましたが、そのとき、卓上から床にころげ落ちて在った一箇の蜜柑みかんをぐしゃと踏みつぶして、おどろき

の余り、ひツという貧乏くさい悲鳴を挙げたので、満座抱腹絶倒して、博士のせつかくの正義の怒りも、悲しい結果になりました。けれども、博士は、あきらめません。いつかは、あいつを、ぶんなぐるつもりで居ります。そいつの、いやな、だみ声を、たつたいまラジオで聞いて、博士は、不愉快でたまりませぬ。ビールを、がぶ、がぶ、飲みました。もともと博士は、お酒には、あまり強いほうでは、ございません。たちまち酩酊めいていいたしました。辻占つじうらうり売の女の子が、ビヤホールにはいつて来ました。博士は、これ、これ、と小さい声で、やさしく呼んで、おまえ、としいくつだい？ 十三か。そうか。すると、もう五年、いや、四年、いや三年たてば、およめに行けますよ。いいかね。十三に三を足せば、いくつだ。え？ などと、数学博士も、酔うと、いくらかいやらしくなります。少し、しつこく女の子を、からかいすぎたので、とうとう博士は、女の子の辻占を買わなければならぬ仕儀にたちいたりしました。博士は、もともと迷信を信じません。けれども今夜は、先刻のラジオのせいもあり、気が弱つているところもございましたので、ふいとその辻占で、自分の研究、運命の行く末をためしてみたくなりました。人は、生活に破れかけて来ると、どうしても何かの予言に、すがりつきたくなるものでございます。悲しいことでございます。その辻占は、あぶり出し式になつて居ります。博士はマッチの火で、とろとろ

辻占の紙を焙り、酔眼をかつと見ひらいて、注視しますと、はじめは、なんだか模様のよ
うで、心もとなく思われましたが、そのうちに、だんだん明確に、古風な字体の、ひら仮
名が、ありありと紙に現われました。読んでみます。

おのぞみどおり

博士は莞爾かんじと笑いました。いいえ、莞爾どころではございませぬ。博士ほどのお方が、
えへへへと、それは下品な笑い声を発して、ぐつと頸を伸ばしてあたりの酔客を見廻しま
したが、酔客たちは、格別相手になつては呉くれませぬ。それでも博士は、意に介しなざる
ことなく、酔客ひとりひとりに、はは、おのぞみどおり、へへへへ、すみません、ほほほ、
なぞと、それは複雑な笑い声を、若々しく笑いわけ、撒まきちらして皆に挨拶いたし、いま
は全く自信を恢かい復ふくなされて、悠々とそのビヤホールをお出ましになりました。

外はそろそろ人の流れ、たいへんでございます。押し合い、へし合い、みんな一様に汗
ばんで、それでもすまして、歩いていきます。歩いていても、何ひとつ、これという目的は
無いのでございますが、けれども、みなさん、その日常が侘わびしいから、何やら、ひそか
な期待を抱懷していらして、そうして、すまして夜の新宿を歩いてみるのでございます。
いくら、新宿の街をいきつ戻りつ歩いてみても、いいことは、ございませぬ。それは、も

うきまつて居ります。けれども幸福は、それをほのかに期待できるだけでも、それは幸福なのでございます。いまのこの世の中では、そう思わなければ、なりません。老博士は、ビヤホールの廻転ドアから、くると排出され、よろめき、その都会の侘びしい旅雁りよがんの列に身を投じ、たちまち、もまれ押されて、泳ぐような恰好で旅雁と共に流れて行きます。けれども、今夜の老博士は、この新宿の大群衆の中で、おそらくは一ばん自信のある人物なのでございます。幸福をつかむ確率が最も大きいのでございます。博士は、ときどき、思い出しては、にやにや笑い、また、ひとり、ひそかにこっそり首肯して、もつともらしく眉を上げて吃きつとなつてみたり、あるいは全くの不良青少年のように、ひゆうひゆう下手な口笛をこころみたりなどして歩いているうちに、どしんと、博士にぶつかつた学生があります。けれども、それは、あたりまえです。こんな人ごみでは、ぶつかるのがあたりまえでございます。なんとということもございません。学生は、そのまま通りすぎて行きま

す。しばらくして、また、どしんと博士にぶつかつた美しい令嬢があります。けれども、これもあたりまえです。こんな混雑では、ぶつかるのは、あたりまえのことでございます。なんとということも、ございませぬ。令嬢は、通りすぎて行きます。幸福は、まだまだ、おあずけでございます。変化は、背後から、やって来ました。とんとん、博士の脊中を軽く

叩いたひとがごいます。こんどは、ほんとう。」

長女は伏目がちに、そこまで語って、それからあわてて眼鏡をはずし、ハンケチで眼鏡の玉をせっせと拭きはじめた。これは、長女の多少てれくさい思いのときに、きつとはじめる習癖である。

次男が、つづけた。

「どうも、僕には、描写が、うまくできんです、——いや、できんこともないが、きょうは、少しめんどくさい。簡潔に、やってしましましょう。」生意気である。「博士が、うしろを振りむくと、四十ちかい、ふとつたマダムが立って居ります。いかにも奇妙な顔の、小さい犬を一匹だいている。

ふたりは、こんな話をした。

——御幸福？

——ああ、仕合せだ。おまえがいなくなつてから、すべてが、よろしく、すべてが、つまり、おのぞみどおりだ。

——ちえつ、若いのをおもらいになつたんでしょう？

——わるいかね。

——ええ、わるいわ。あたしが犬の道楽さえ、よしたら、いつでも、また、あなたのところへ帰っていいって、そうちゃんど約束があつたじゃないの。

——よしてやしないじゃないか。なんだ、こんどの犬は、またひどいじゃないか。これは、ひどいね。蛹こぶちでも食つて生きているような感じた。妖怪ようかいじみている。ああ、胸がわるい。

——そんなにわざわざ蒼あおい顔して見せなくたっていいのよ。ねえ、プロや。おまえの悪口言つてるのよ。吠えて、おやり。わん、と言つて吠えておやり。

——よせ、よせ。おまえは、相変らず厭味いやみな女だ。おまえと話をしていると、私は、いつでも脊筋が寒い。プロ。なにがプロだ。も少し気のきいた名前を、つけんかね。無智だ。たまらん。

——いいじゃないの。プロフェッサアのプロよ。あなたを、おしたい申しているのよ。いじらしいじゃないの。

——たまらん。

——おや、おや。やっぱり、お汗が多いのねえ。あら、お袖なんかで拭いちや、みつともないわよ。ハンケチないの？　こんどの奥さん、気がきかないのね。夏の外出には、ハ

ンケチ三枚と、扇子、あたしは、いちどだつてそれを忘れたことがない。

——神聖な家庭に、けちをつけちや困るね。不愉快だ。

——おそれいます。ほら、ハンケチ、あげるわよ。

——ありがとうございます。借りて置きます。

——すっかり、他人におなりなすつたのねえ。

——別れたら、他人だ。このハンケチ、やつぱり昔のままの、いや、犬のおいにするね。

——まけおし言わなくつていいの。思い出すでしょう？ どう？

——くだらんことを言うな。たしなみの無い女だ。

——あら、どつちが？ やつぱり、こんどの奥さんにも、あんなに子供みたいに甘えかかつていらつしやるの？ およしなさいよ、いとしをして、みつともない。きらわれますよ。朝、寝たまま足袋をはかせてもらつたりして。

——神聖な家庭に、けちをつけちや、こまるね。私は、いま、仕合せなんだからね。すべてが、うまくいつている。

——そうして、やつぱり、朝はスープ？ 卵を一つ入れるの？ 二つ入れるの？

——二つだ。三つするときもある。すべて、おまえのときより、豊富だ。どうも、私は、いまになって考えてみるに、おまえほど口やかましい女は、世の中に、そんなに無いような気がする。おまえは、どうして私を、あんなにひどく叱つたのだろう。私は、わが家にいながら、まるで居い候そうろうの気持だった。三杯目には、そつと出していた。それは、たしかだ。私は、あのじぶんには、ずいぶん重大な研究に着手していたんだぜ。おまえには、そんなこと、ちつともわかつてやしない。ただ、もう、私のチョツキのボタンがどうのこの煙草の吸殻がどうのこのうの、そんなこと、朝から晩まで、がみがみ言って、おかげで私は、研究も何も、めちやめちやだ。おまえとわかれて、たちどころに私は、チョツキのボタンを全部、むしり取ってしまった。それから煙草の吸殻を、かたつぱしから、ぽんぽんコーヒー茶碗にほうりこんでやった。あれは、愉快だった。実に、痛快であった。ひとりで、涙の出るほど、大笑いした。私は、考えれば、考えるほど、おまえには、ひどいめにあつていたので。あとから、あとから、腹が立つ。いまでも、私は、充分に怒っている。おまえは、いつたいに、ひとをいたわることを知らない女だ。

——すみません。あたし、若かつたのよ。かんになんしてね。もう、もう、あたし、判つたわ。犬なんか、問題じゃなかつたのね。

——また、泣く。おまえは、いつでも、その手を用いた。だが、もう、だめさ。私は、いま、万事が、おのぞみどおりなのだからね。どこかで、お茶でも飲むか。

——だめ。あたし、いま、はつきり、わかつたわ。あなたと、あたしは、他人なのね。いいえ、むかしから他人なのよ。心の住んでいる世界が、千里も万里も、はなれていたのよ。一緒にいたって、お互い不幸の思いをするだけよ。もう、きれいにおわかれたいの。あたし、ね、ちかく神聖な家庭を持つよ。

——うまく行きそうかね。

——大丈夫。そのかたは、ね、職工さんよ。職工長。そのかたがいなければ、工場の機械が動かないんですって。大きい、山みたいな感じの、しっかりした方。かた

——私とは、ちがうね。

——ええ、学問は無いの。研究なんか、なさらないわ。けれども、なかなか、腕がいいの。

——うまく行くだろう。さようなら。ハンケチ借りて置くよ。

——さようなら。あ、帯がほどけそうよ。むすんであげましょう。ほんとうに、いつまでも、いつまでも、世話を焼かせて。……奥さんに、よろしくね。

——うん。機会があれば、ね。」

次男は、ふつと口をつぐんだ。そうして、けツと自嘲した。二十四歳にしては、流石に着想が大人びている。

「あたし、もう、結末が、わかっちゃった。」次女は、したり顔して、あとを引きとる。

「それは、きつと、こうなのよ。博士が、そのマダムとわかれてから、沛然と夕立ち。

どうりで、むしむし暑かった。散歩の人たちは、蜘蛛の子を散らすように、ぱあつと飛び散り、どこへどう消え失せたのか、お化けみたい、たったいままで、あんなにたくさん人がいたのに、須臾にして、巷は閑散、新宿の舗道には、雨あしだけが白くしぶいて居りました。博士は、花屋さんの軒下に、肩をすくめて小さくなつて雨宿りしています。ときどき、先刻のハンケチを取り出して、ちよつと見て、また、あわてて、袂にしまいこみます。ふと、花を買おうか、と思います。お宅で待つていらつしやる奥さんへ、お土産に持つて行けば、きつと、奥さんが、よろこんでくれるだろうと思ひました。博士が、花を買うなど、これは、全く、生れてはじめてのことです。今夜は、ちよつと調子が変わる。ラジオ、辻占、先夫人、犬、ハンケチ、いろいろのことがございました。博士は、花屋へ、たいへんな決意を以て突入して、それから、まごつき、まごつき、大汗かいて、それでも、

薔薇の大輪、三本買いました。ずいぶん高いのには、おどろきました。逃げるようにして花屋から躍り出て、それから、円タク拾つて、お宅へ、まっしぐら。郊外の博士のお宅には、電燈が、あかあかと灯つて居ります。たのしいわが家。いつも、あたたかく、博士をいたわり、すべてが、うまくいつて居ります。玄関へはいるなり、

——ただいま！ と大きい声で言つて、たいへんなお元気です。家の中は、しんとして居ります。それでも、博士は、委細かまわず、花束持つて、どンドン部屋へ上つていつて、奥の六畳の書齋へはいり、

——ただいま。雨にやられて、困つたよ。どうです。薔薇の花です。すべてが、おのぞみどおり行くそうです。

机の上に飾られて在る写真に向つて、話かけているのです。先刻、きれいにわかれたばかりのマダムの写真でございます。いいえ、でも、いまより十年わかいときの写真でございます。美しく微笑んでいました。「まず、ぎつと、こんなものだ、と言わぬばかりに、ナルシツサスは、再び、人さし指で気障な頬杖やらかして、満座をきよると眺め渡した。「うん。だいたい、」長兄は、もつたいぶつて、「そんなところで、よろしかろう。けれども、——」長兄は、長兄としての威厳を保つていなければならぬ。長兄は、弟妹たちに

較べて、あまり空想力は、豊富でなかった。物語は、いたって下手くそである。才能が、貧弱なのである。けれども、長兄は、それ故に、弟妹たちから、あなどられるのも心外でならぬ。必ず、最後に、何か一言、蛇足だそくを加える。「けれども、だね、君たちは、一つ重要な点を、語り落している。それは、その博士の、容貌についてである。」たいしたことでもなかった。「物語には容貌が、重大である。容貌を語ることに依って、その主人公に肉体感を与え、また聞き手に、その近親の誰かの顔を思い出させ、物語全体に、インチメートな、ひとごとでない思いを抱かせることができますものです。僕の考えるところに依れば、その老博士は、身長五尺二寸、体重十三貫弱、たいへんな小男である。容貌について言うなれば、額は広く高く、眉は薄く、鼻は小さく、口が大きくひきしまり、眉間みけんに皺しわ、白い頬ひげは、ふさふさと伸び、銀ぶちの老眼鏡をかけ、まず、丸顔である。」なんのことはない、長兄の尊敬しているイプセン先生の顔である。長兄の想像力は、このように他愛がない。やはり、蛇足の感があった。

これで物語が、すんだのであるが、すんだ、とたんに、また、かれらは、一層すごく、退屈した。ひとつの、ささやかな興奮のあとに来る、倦怠けんたい、荒涼、やりきれない思いである。兄妹五人、一ことでも、ものを言い出せば、すぐに殴り合いでもはじまりそうな、

険悪な気まずさに、閉口し切った。

母は、ひとり離れて坐って、兄妹五人の、それぞれの性格のあらわれている語りかたを、始終にここにご微笑んで、たのしみ、うっとりしていたのであるが、このとき、そつと立つて障子をあげ、はつと顔色かえて、

「おや。家の門のところ、フロック着たへんなおじいさん立っています。」

兄妹五人、ぎよつとして立ち上った。

母は、ひとり笑い崩れた。

(昭和十四年五月)

青空文庫情報

底本：「新樹の言葉」新潮文庫、新潮社

1982（昭和57）年7月25日初版発行

1992（平成4）年11月15日17刷

初出：「愛と美について」竹村書房

1939（昭和14）年5月

入力：田中久太郎

校正：鈴木厚司

2001年11月1日公開

2016年2月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

愛と美について

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>